

だから職員が辞めていく ダメな施設を選ばないために 22

著者	岡田 耕一郎, 岡田 浩子
雑誌名	シルバー新報
号	839
発行年	2008-08-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00000215/

だから職員が辞めていく



ダメな施設を選ばないために

22

岡田耕一郎(おかだ・こういちろう) 経営大学経済学教授。スウェーデン、ドイツ、日本、ドミニカ共和国の労働市場を研究。

岡田浩子(おかだ・ひろこ) 福祉士、著者。『老と死の社会学』(1977年)を著し、出版。

大抵の老人ホームは、その仕事が好きだ。仕事はしんどい問題を抱えているので、それほど快活に、とにかくやっていると楽しい仕事で、毎日やっていても飽きないという。やりがいがあるとか、自己実現が出来るというよりも、感覚的に好きだと言

う。さらに、彼らは明るく、いつもニコニコしている。いや、笑っていると言うよりも、心に引っかかりがないと言ったほうが、うまく伝わるだろう。

老人ホームは現状を丁寧に正確に説明すればするほど「3K」で「3S」の職場だが、それでも老人ホームが好きで、退職を考えず、介護職員として頑張りたいと、きっぱり言う職員もいる。

数は決して多くないが、いることは事実だ。そんな介護職員には、いくつかの共通点がある。

まず、お年寄りが好きだ。お年寄りに興味があるとか、人間自体に面白さを感じるとか、あるいはお姫様だっこが出来るくらいに小さいのかわいいとか、彼らはさまざまな理由を説明してくれるが、要はお年寄りが好きなのだ。職員に

人間相手なので、もちろん悩むこともあれば、傷つくこともあると思うのだが、立ち直りが早いのかも知らない。



老人ホームと言う場を悲観的に考えない、と言う共通点もある。

職員の中には、介護は好きだけれど老人ホームと言

う組織が嫌いとか、他の職員がいやという人も多く、その結果、ホームヘルパーになったり、グループホームに移ったり、老人ホームとは別の道を探したりする。

一方、老人ホームに残って介護をする人たちは、やはり老人ホームという大きなところで介護をする問題点や限界を感じながらも、その役割を理解し、その枠の中で頑張っているという発想をする。老人ホームと言

施設介護を前向きに捉える発想を持つ

観的に考えないと言う点で、施設介護を前向きに捉えているのだ。

即興でお芝居が出来ることも特徴だ。認知症の利用者の中には、人生の中で最も輝いていた時代に戻っている人が少なくない。女性なら若かった娘時代や、子育てで充実した生活を送っていた時代、男性なら、頑張っていた時代、外見はどうあれ、気持ちは輝いていた過去にあるので、介護する職員は、利用者の昔と向かい合う役者にならなければならぬ。

警察署長だった利用者

は、老人ホームの職員を当時の自分の部下だとみている。介護職員は、その警察署長に対してうやうやしく敬礼し、その日の状況を簡潔に報告・連絡・相談し、指示を仰ぐことになる。

良きに計らうようにと、ご指示をいただくと、職員はそのあとの介護がいたってしやすくなる。

空中に手を伸ばし、見えない壁にしっかりと手を塗っている元左官の人には、なるべく食堂の端から塗り始めるようにお願いをしなければならぬ。

真ん中から塗り始めると、絶えず人とぶつかるからだ。職員は注文主なので、仕事の発注は、最初にきちんとしておいた方がよい。

歯医者だった利用者は、放っておくと、食堂に座っている利用者の口を無理やり開けようとするので、職員が忙しくて相手が出来ない日には、本日休診であることを前もって伝えておかなければならぬ。

事務員だった利用者は、朝になると玄関を出て会社に行こうとするので、職員はなだめながらテーブルの近くに連れて行く。そうすれば、会社に着いて、仕事をするとところから始められるので、むやみな徘徊で体調を悪くすることがなくなる。

このように、老人ホームにおいて、職員は介護職員であるとともに、即興劇の役者であり、その場の空気が読めなければ、とうてい務まらない。

さらに、理論派の職員は、老人ホームは多くのことを学んで人間として成長することが出来る場だと言

う。この言葉は若い職員から聞くことは少ないが、中堅職員からはしばしば聞かされる言葉だ。お年寄りは残りの人生が少ないので、取り繕っている心の余裕がない。人間性をむき出しにして、職員にぶつかってくる。

そこで職員は生の人間といふものを体感し、いろいろなことを大いに考えさせられることが多いと言

う。また、他人の人生に寄り添って生きていくことで、さまざまなことを学ぶことが出来ることも言う。人間が、本当に好きなのだろう。

人間が好きで、お年寄りが好きで、それでも老人ホーム(施設介護)が好きだと言う職員がいる。この職員がどれほどいるかがチェックポイントだ。

本連載の第一弾はとりあえず今回をもって終了としますが、加筆修正をし、単行本として出版することになりました。施設内研修の教材として活用くださ